

## キベリハムシが初めて日本で記録されたころの思い出

高橋 寿郎

キベリハムシ *Oides bowringii* (BARY) は、現在の日本では兵庫県下の分布が知られているだけといった大変珍しいハムシである。

緑青色に黄褐色にふちどられた美しいハムシの仲間のうちでも、最大級の大型のハムシの1種である。このハムシが日本から初めて見つけられた頃から、筆者もこのハムシに接してきた関係で、このハムシの日本での記録を第二次世界大戦まで(1945)を中心にまとめてみた。

このハムシが日本での文献の中で初めて現れたのは、1933年加藤正世博士が分類日本原色昆虫図鑑第9輯 p1. 23, f. 6 にカラーで産地は台湾(当時の台湾は日本)として図説されたのにはじまる(尤も日本の雑誌である動物学雑誌 Vol. 39, No. 466, p. 323-329, 1927)の中で土井久作が“朝鮮産業虫科の研究”を発表しており、そのp. 337に *Oides bowring* BARY として支那、朝鮮を分布に記してあるが、データは全くついていない。種名はミスプリントである。

加藤正世博士が図説されたものが何処産で何時採集されたものか、誰が採集したものであるのかといったことが全くわからない。同じ年、関公一が“御影町附近産の甲虫目録(其の二)”(昆虫界 Vol. 1, No. 5, p. 434, 1933)を発表、その中でこの加藤の図鑑による同定としてキベリハムシ *Oides bowringii* BARY を記録している。この記録が日本で2番目にキベリハムシが文献上に現れたものになるかと思う。ただし、この産地が何処であるのかははっきりしない。この“御影町附近産の甲虫目録(其の一)”(昆虫界, Vol. 1, No. 3, p. 251, 1933)に収録範囲を“御影町を中心とし、六甲山、摩耶山、芦屋山等をも含み”としている。したがって、六甲山麓と考えるのが妥当のように思われる。そのはじめに御影町附近の採集地も人口の増加に蠶食せられ次第に狭められてゆくこと

は残念でならないと記されており、当時既に神戸の無秩序な開発がおこなわれはじめている様子がうかがえる。

1933年8月6日六甲山の中腹あたりの藪にて採集せる甲虫を加藤正世博士の図鑑で調べた所キベリハムシ(新稱) *Oides bowringii* BALY [分布] 台湾とあったが、この点を教えてほしいといった質疑が人見一馬によってなされ(昆虫界 Vol. 1, No. 6, p. 656, 1933)、これに対し加藤正世博士は1933年夏の採集旅行の途中神戸で那須範子サンの標本中にキベリハムシを見出し貰い受けたが、台湾のものとは全く同種でしたと説明してあり、同時にハムシ専門であった湯浅啓温博士のこのハムシについての問合せに対する返事がのせられていた。その回答で“キベリハムシは台湾から未記録だったのではないだろうか。勿論内地からもはじめてで私は未だ同定したことがありません。”とある。

生田豊一は神戸市篠原で 1933. VII. 20 キベリハムシを採集したのを貰ったと記録を発表している。学名 *Oides bowringii* BALY となっている(昆虫界 Vol. 2, No. 7, p. 118, 1934)、此处で加藤正世博士は江崎悌三博士の私信で、江崎悌三博士が中学時代大阪附近で採集されたキベリハムシの標本を、学校の宿題の中に見つけて貰いうけて現在も所有しているとのことを記している。江崎悌三博士の中学時代のことであるから、大正2年頃(1913)になるのかと思われる(採集場所が全くわからない。大阪附近とあるが、大阪附近にいたとは思われないが。江崎悌三博士は大阪北野中学校卒業)。

足立輝一は1934年神戸一中の夏季宿題での“生徒採集昆虫調査報告”を発表された(昆虫界 Vol. 2, No. 8, 1934)。その中で「キベリハムシ」は数頭採集されていた、この種はさほど珍しくないとししているが、採集場所など記されていない。学校の関係から、摩耶山、六甲山のどちらかと考えられ

る(足立輝一は神戸一中～現神戸高校～から北大理学部動物学科を卒業, 朝日新聞社入社, 科学朝日, 週刊朝日の編集長をつとめた方)。

加藤正世博士は, 1933年8月11日, 六甲山へ採集を試みた際, 那須範子の所によってキベリハムシを見出し, 摩耶山産のものであるとのことで, そこへ案内して貰ったが見られなかったとのこと(那須範子の岳父は内田清之助博士と同級生であると)(昆虫界 Vol. 2, No. 9, p. 329, 1934)。

1934年9月15日より1週間, 大阪淀屋橋美津濃ビルの2階で昆虫趣味の会主催の第2回昆虫展覧会が開催された。この出品物の中にキベリハムシがあり, それについては加藤正世博士は特に注目, 詳しく産地を示されている。

鳥原(鳥原とミス印刷)(9.8.9, 神戸平野小一年, 箸方照男採集), 平原(9.8.19, 同六年米澤 璋採集), 再度山(9.8.17, 同五年, 城崎 進採集), 芦屋高座瀧(6.7.8, 甲陽中学)とある。鳥原, 平野, 再度山はいずれもお互いに近い距離の場所である。いわゆる六甲山系の西端近くに位置する所である(昆虫界 Vol. 2, No. 12, p. 688-689, 1934)。

1937年, 横山光夫は“環境とFamily 昆虫の大阪(そのI)”を公表(昆虫界 Vol. 15, No. 45, p. 52, 1937), その中で“六甲山のキベリハムシの多産は獨りで二百数十頭を採集出来た程度で驚くに足る”と記された。このことは同氏が翌年発表の“環境とFamily 昆虫の大阪(そのII)”(昆虫界 Vol. 6, No. 54, p. 44, 1938)の中で“六甲山で近來特に一大発生を全山に見出されて驚異とされ獨り内地に於ける唯一無二の採集地として先づキベリハムシを紹介しなくてはならない。その最も多く生棲するのは鳥原水源地附近であり續いて木山牧場(本山牧場?—筆者注)跡より寒天山に越す一軒家の附近であるが山頂に續く廻遊路にも各所にその姿を見受けられる。このキベリハムシが始めて六甲山に於て採集されたのは今から約十年前小林氏(小林桂助氏—筆者注)によって得られたものであるが当時小林氏の話では台湾のものとして信じる者も無かったが日本の商港神戸に移住されたキベ

リハムシは遂に本土の帰化昆虫と成った事はオホキンカメムシと共に著名なものの一つであらう(原文通り)”と大変貴重な報文を発表している。

同年平山修次郎の原色千種續昆虫圖譜が出版され, その中で“兵庫県六甲山産 4.8.1936”としてキベリハムシがカラーで圖説された(pl. 74, f. 2, p. 167), “本州(神戸地方), 台湾ニ産ス”とある。

1937年出版の大阪昆虫同好会(大阪府箕面公園)編集“京阪神の昆虫採集地”という小冊子が発行された。その中で(p. 19)“六甲山. キベリハムシ(六, 七月)等も稀に採集される”とある。

1935年田中光照氏が鳥原貯水池畔でキベリハムシを採集飼育を始められた。田中光照氏は明石高校から東京農大にすすまれた方で, 弟の田中靖也氏が神戸二中からやはり東京農大にすすまれた方で, この田中靖也氏が筆者の神戸二中(現兵庫高校)の一年先輩にあたり, 御宅も筆者の家の近くでお伺いして飼育中のキベリハムシ何百頭がピナソカズラを蚕食している様子を拝見, 驚いたりしたものである。これ等は夢野大師登り口旭ヶ丘及び鳥原産のもので, これらの飼育に基づいて1938年, 田中光照氏は兵庫県中等博物学雑誌創刊号に“キベリハムシ”と題して形態, 生態についての報文を発表になった(残念ながら紙面の都合で飼育状況等が割愛されている)。

1938年鍋木 渡が“キベリハムシ”と題する報文を発表(昆虫界, Vol. 6, No. 58, p. 26-29), その形態, 生態, 分布等をのべているが何処産の材料を用いているのか明記は無い。

当時神戸税関に勤務しておられた松本賢吉氏もキベリハムシを飼育しておられ, 1938年“キベリハムシに関する知見”なる報文を発表になった(日本の甲虫 Vol. 2, No. 2, p. 65-67, 1938)(文中キベリハムシが明治末頃に渡来, 帰化昆虫となったものではなからうかと記している。氏はキベリハムシ情報交換のため1938年筆者宅へこられた)。

昭和14年(1939)6月14日の大阪朝日新聞(No. 20711)紙上に“向学の兄弟に凱歌, 亜熱帯の昆虫を裏山で発見, 研鑽, 自家飼育に成功”という見

出しで写真も入れて大きく報道された。これは鳥原貯水池畔並びに夢野大師登り口旭ヶ丘で採集のキペリハムシを飼育された田中光照・田中靖也兄弟のことである。

筆者が鳥原貯水池畔でキペリハムシを採集したのは、1936(昭和11)年7月24日が初めてである。同年昆虫趣味の会に入会した。入会して初めて送られて来た会誌“昆虫界”はNo. 29, 30, 31の合併号の岸田久吉・中村 倭共著の“日本帝国産蝶類目録”という242p.の大冊であった。何と云っても初めて昆虫に関する機関誌を手にしたものが蝶類目録であったのだからビックリした。これはどの様なものであるのかその内容を理解出来ずに困ったものである。

1938年には昆虫趣味の会神戸支部が出来、早速入会させて頂いて支部長関 公一氏宅(御影町)へは何回か訪問、いろいろと虫のことを教えて貰った。近所に住んでいた幹事の米谷正司氏の宅へも何回か訪問、氏の立派な標本を見せて貰ったり、ARROWのFauna of British India Lamellicornia, Part.1, Cetonia, Dynastinaeを見て驚いたりした(尤もこの番は関 公一氏の蔵書だったようである)。他にBREUNINGのMonog. der Gattung Carabusを自慢気に見せて下さったのが忘れられない。氏は当時標本商のようなことをやっており、氏から昆虫標本箱を領けて貰って現在も所有している。そこで新島善直・木下栄次郎両博士の“こがねむしに関する研究報告、第II巻”をお借りしてコピーさせて頂いた(当時は文献のコピーは手書きか写真に撮る位で今のようなゼロックスは無かった。筆者は手書きで寫した。これは製本して現在も持っている)。こうしてコガネムシの研究にのめり込むきっかけとなった。

一方、キペリハムシの飼育を始めた、このハムシの調べを始めていた。はたしてこのハムシが台湾にいるのかどうか、当時台北帝大におられた中條道夫博士に手紙を差しあげお尋ねした所、台湾にキペリハムシは分布していないと思うとの返事を頂いた。

キペリハムシに関する文献は東大農学部の三橋信治氏にお尋ねして返事を頂いたが、分布はHongkong, China, Korea, Formosaとなっていた。

明石にお住いであった鈴木元次郎氏宅(確か表戸を開いた家の入口に花園昆虫研究所の表札があったと記憶している)を訪問、キペリハムシについての情報をお伺いしたが、20年位前から神戸にいたようだと言った程度の情報しか得られなかった。氏は目下日本産のオサムシリストを作製中だとタイプで打った原稿を見せて下さった。

当時からキペリハムシが神戸に何時頃からいたのかと云ったことに興味があったが、記録がほとんど無くただ漠然と大正の初めか明治時代にやって来たのではないかといった程度であった。

戦後のことであるが、戸沢信義氏からの貴重なお便りを頂いた。即ち、1918(大正7)年ごろ国鉄(当時は鉄道院)三宮駅(今の元町駅付近)の貨物掛に勤務しておられた加古川在住の高田千万喜という人が、駅構内で貨物からもれたものを採集された標本並びにその他の地で採集した標本を持参、戸沢氏を訪問された由(そのときの標本に基づき野平安芸雄博士が昆虫学雑誌第3巻、第3・4号、1919に短報を発表しておられるとのこと)。その中には鳥原で採集されたキペリハムシの標本が数頭あったとのこと。駅構内での採集品の中にはダイコクコガネや外国産の甲虫があり、インド、オーストラリア産らしい標本もあり、それらが貨物からこぼれたものであるとのこと。当時の状況から外国産の昆虫が日本に潜入することがかなりあったのではなかろうか(日本に定着できたかどうかは別として)。したがってこのような経過でキペリハムシが神戸で定着したのではないかと考えられ、たいへんおもしろい記録である。なお同氏のコレクションは土地の素封家にゆずられたとのことで、一部は京都大学に売られたとのことである。

1936年、OGLOBLINのFauna U. S. S. R. Vol. 20, No. 1, Chryomelidae, Galerucinaeが出版されたが、この中で*Oides bowringii* BALYはとりあげら

れているが(p. 149), 分布に Korea, Japan が記録されているだけで具体的な産地などは何も示されていない。

筆者も鳥原産のもので飼育をしたりしたものであるから, “キベリハムシに就いて”なる報文を発表(昆虫界 Vol. 8, No. 72, pp. 104-112, 1940), その形態, 生態などを紹介した。

戦前他にキベリハムシについての報文があるがいずれも分布を中心にのべたもので, このハムシが何時頃から日本(神戸)にいたのかとか, 何故他の地域に分布が見られないのかと云ったようなことは全くわかっていなかった。

世は戦争で虫どころではなくなった。筆者も第一次学徒出陣で広島から中国大陸の戦線に送られた。戦後出版の各種原色図鑑には美しいキベリハムシはカラーで紹介されており, 一般には良く知られたハムシとなっていると思われるが, 依然としてこのハムシの日本での棲息の始まった時期とか分布がなぜ限られているのかといった問題は不明のままである。

戦後, 一番初めに分類学文献として現れたのは CHŪJŌ et KIMOTO, Systematic catalog of Japanese Chrysomelidae (Pac. Ins. 3(1):117-202, 1961) であると思われる。そして分布は China, Korea, Japan となっている。

1963年発表の J. L. GRESSITT & S. KIMOTO の “The Chrysomelidae (Coleop.) of China and Korea, Part. 2” (Pacific Insects Monograph 1B:476, 1963) の中で中国での産地を多く記入しており, 分布としては “S. China (Kwantung, Fukiens, Kiangsi, Hupeh, Szechuan, Sikang), Korea?, Japan” となっている。Korea には疑問符がつけられている。

木元新作博士は, “The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands, VI” (Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ. Vol. 13, No. 2, p. 307, 1964) の中で兵庫県神戸市鳥原, 六甲山の標本を示して分布として “S. China, Korea, Japan (Honshu)” とされている。

ここで一寸注意しなくてはならないのは, 原記載は BARY によって *Adorium bowringii* BALY と新種記載されているのであるが(Ent. Soc. Lond., Trans. ser. 3, 1:623, 1863), 日本での古い文献では種名が *bowring*, *bowringi* となっている。この種が *Oides* 属の種となったのは LABOISSIERE の論文からである(1919, Soc. Ent. France Bull. p. 161 “N. China”). 木元新作博士の “Chrysomelidae (Coleoptera) of Thailand, Cambodia, Laos and Vietnam, IV, Galerucinae” (ESAKIA, No. 27, pp. 1-241, 1989) では本種は Vietnam, S. China, Japan, Korea と分布がなっている(p. 35-36)。朝鮮にも分布しているのかどうか現在でもよくわからない。なお, 上記木元新作博士の論文でトンキン産で報告されている *Oides elegans* LABOISSIERE, 1919, *Oides tonkinensis* LABOISSIERE, 1929 は共にキベリハムシのシノニムとされている。1990年, ベトナム産の♂1♀を入手した。雄は初めて見たのであるが, 形態から日本産のものは亜種になるのではと考えている(きべりはむし Vol. 18, No. 2, pp. 43-44, 1990)。

筆者は1944年, 中国湖北省当陽県河溶鎮の戦線で野生のノブドウに数百といった *Oides decempunctata* BILLERO トホシセマルオオハムシが太陽にキラキラと輝いて群棲しているのに出会って, キベリハムシと同じような自然状況にいることに感激したものである。まだまだ日本産のキベリハムシについてはわからないことが多くある。このような大型の美しいハムシが日本の兵庫県下のみ分布していると云うのは不思議である。食草からしてもっと広くてもいいように思うのだが, これからも調べて見なくては行けないハムシである(文中に出て来る戦前の方々で現在生きておられる方は何人もいない。淋しい限りである)。(兵庫県甲虫相資料・339)

(1997・VI)

(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)